

---

# ストレンジャー

ESP

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ストレンジャー

### 【Nコード】

N2741A

### 【作者名】

ESP

### 【あらすじ】

高校卒業を控えたごく普通の少年が、異端な世界に足を踏み入れ、異端な存在へと変わっていく異世界の物語。  
「相変わらず、ツイてない人生だった」

## 序章【誤差と必中】

「…来ましたね」

草木生い茂る樹海の中で、二人の男女が茂みの中から身体を起こした。

「…予見より、かなり早いな。歪みも相当ずれている」

女の言に、男が若干の戸惑いを含め応じた。

「…位置的に短時間では困難です。最悪捕獲される恐れも…」

「大丈夫だろう。予見された奴であれば殺されることはない。私が保証するし、姉の>詠みくが外れる事はないだろう」

男は先程の戸惑いを打ち消し、弱気になる女の肩を優しく叩いた。女は安心したように微笑み、そして直ぐに顔を引き締める。

「では、行くか」

「はい」

その言葉を置き去りにし、二人の男女は音も無く消え去った。

そこに二人の存在は、皆無。何百年もそのままであったかの様に、二人が存在した事象はその場から見事に消失していた。

## 一章【無知なる者】

俺は、とことん不運な人生を歩んできたと思う。

齢18歳にして達観しすぎな様な気もしないでもないが、そこらへんは置いとくしよう。

まあ、若いから。許されるもんだろ。

…って、そんな悠長にしてる場合じゃないんだな、これが。

本来なら不運な人生のあらましを説明したいところだが、とりあえず今の状況が洒落になってないんだよ。

てな訳で、せめて名前だけでも…。

俺の名は、倉本弘樹。就職活動真っ只中の普通の高校生の筈だったのだが。

なんかよく分からん内に、現在殺されそうになっている。

「てめえどっからきやがった!？」

俺のすぐ前方ででかいナイフをちらつかせるボロキレの様な茶色のコートを着た巨漢が、血走った目で怒鳴りやがった。

そりゃこつちが聞きたいくらいだ!長州小力みてえな顔しやがって調子に乗るんじゃないよ!

…と言ったあとキンタマを蹴り上げたかったが、刃物ちらつかされた手前、そんな勇氣など俺はもっていない。

「…や、取りあえず落ち着きましょ?ねっ?」

つーのが精一杯の勇氣だった。

小力(に似た)は俺の声が聞こえてないのか同じ言葉を何回も吐く。そうこうするうちに小力の仲間とおぼしき似た様なコートを着た男達が現れ、俺はすっかり包囲された。

「もう一度言っぞ。何処から来やがった?まさか蛮国の密偵か?」

「…は?蛮国って…?」

「とぼけるな」

小力は質問に答えず、無抵抗をみせている俺にあらうことかナイフをつきつけやがった。

俺は悲鳴を上げ、硬直する。

「見れば黒髪に黒瞳。肌も黄色い。外見的に間違いじゃねえ」

いや、間違いだろ。俺は日本人だぞ。小力でめえも日本語喋ってんだろ。しかも蛮国ってなんだ？

「…だが、見たところ戦闘要員って柄じゃねえな。何も知らず迷いこんだ馬鹿な旅行者か」

…どうでもいいけど、小力に馬鹿呼ばわりされると腹立つ。

小力はそれから少し間を置き、何やら仲間と相談し始めた。

捕虜だの死刑だの不吉な単語が飛び交い、俺は顔から血の気が引くのを感じた。

そして更なる沈黙の後、小力は実に気味悪い微笑を浮かべると、ナイフを引っ込め言った。

「取りあえず、直ぐに命はとらん。牢に閉じこめとくか」

…マジっすか。

俺が何か言う間もなく首筋に鈍痛が走り、途端に視界が明滅した。

更に衝撃が加わり目の前がブラックアウトする。

薄れゆく意識の中、俺は首筋を打たれたら本当に気絶するんだ、などと全くどうでもいい事を考えていた。

## 二章【驚愕】

うん？なんだか滅茶苦茶頭が痛えな…二日酔いにも似た症状に誘発され、俺は目を覚ました。

身体を起こし、辺りを見回す。どうやら自分の部屋ではない様だ。いくら俺の家が貧乏だからって、一面石壁で剥き出しにはなっていない。よくみると所々ヒビ割れや黒く変色してやがるよ。…うわっ地面も埃だらけのデコレーションつきだ！案の定俺の着た美女がデッサンされてるＴシャツまでもが見事に被って浸透していた。とりあえず手でほろえるところは落とす。

こりゃあ顔も髪も酷い有り様だと予想した。

話し変わり、どうやらここは牢屋の様だ。見るからに硬そうな鉄のドアがあること以外、全く何も無い。

てかトイレぐらいは設置した方がいいだろ。…是非匠によるビフォーアフターを受ける事をお勧めするね。マジで。

…とか言ってる場合じゃねえよな。あの時の話し合いの内容から察するに、物騒な事になるのは間違いない。だが、映画みたいに脱走なんかはつきり言って無理だ。非現実な状況にいるが、俺自身はごく普通の少年ですから、残念。

と俺が真剣に悩みだしていると、唯一の入り口であるドアが勢いよく開け放たれ、ゴツイ顔と体格の大男が静かに入ってきた。

こういう奴はやられ役だと相場が決まっている。そしてこれが脱走の好機…！

「出る」

「はい」

………ていうか、何も言えないでしょ。こんな大男にドスの効いた大地が震えるかの様な低音ボイスで言われたら、ね？嫌な予感で胸一杯お腹一杯の俺は一切の抵抗も質問もせずに、金魚の糞状態で後に続く。

連れてかれたのは、無数の人間がひしめきあう広場だった。

皆服装はあの小力が着ていた茶色のコートで、場に俺が来た途端何故だか騒ぎ始めた。

これは予想通りというか、かなりヤバい状況だ。男達は広場の中央を囲む様に立っており、中央には小力。そして鎧と剣で武装した今時流行らない中世のコスプレをきめた男。

明らかに処刑する気満々の空気だ。多少古めかしい空気だが、殺気つつものがバシバシ伝わってきている。

ここで、俺はとうとう諦めた。小力が何か言っている。なんだかもうどうでもよくなり、連れられるままに進み出た。

「今からお前に対して尋問を行う。返答によってはこの場でぶっ殺す」

野次馬から歓声が上がる。返答も何も殺す気満々じゃねえか。

…だが、妙に落ち着いている俺に、内心驚いている。

これから生きるか死ぬかっていう時に、だ。

街の不良に絡まれただけで萎縮していた俺にとって、これは極めて異例だ。てゆうか、すげえぞ俺。

しかし、死ぬ直前になって成長するなんて、俺はサイヤ人か。

「…っ聞こえてんのかあっ!!」

突如小力の怒鳴り声が響いたのと同時に、俺は後方に思い切りぶつとんだ。

…どうやら俺が思考している最中に、色々言っていたらしい。反応のない俺にキレた小力が、俺を殴り飛ばした様だ。鼻に激痛が走り、俺は手で押さえながら転げ回った。

声もなくのたうち回る俺に、投げかけられる嘲笑の渦。畜生、殴られたのは初めてなんだぞ！親父にもまだ…

「…もういい。殺れ」

そうそう…もう早いとこ殺っちゃってくれ。こんな痛い思いするぐらいなら、死んだほうがマシだ。

「こんな舐めた奴は初めてだ。存分に苦しめてな」

…まじすか。

ちよつと洒落にならんことになってきた。せめて楽に死なせてくれても…… ああ、コスプレ野郎が剣抜いちゃったよ、見るからに切味鋭そうじゃん。

逃げようにも、多勢に無勢。こりやあもう…。

い、今頃怖くなってきた…！嫌だ死にたくない！！

剣が大きく振り上げられる。俺は血と涙で汚れた顔を醜く歪め、絶叫した。

目を閉じ、叫び続ける俺。

その瞬間が長すぎたのに気付いたのは、男達の動揺したざわめきだった。

俺はゆっくりと目を開け、状況を確認する。

そして俺は、信じられない光景を目にした。

つい数瞬までそこにいなかった筈の黒ずくめの人間が、コスプレ野郎の剣をなんと二本の指で挟む様に受け止めていた。

そして、更に驚愕。

剣を受け止めた腕で、なんとそのままコスプレ野郎を持ち上げたのだ。片手で、しかも指だけで。

場内に沈黙が走る。コスプレ野郎は持ち上げられたまま放心していた。

俺はもう何かなんだか判らず、殴られた痛みも殺されかけたのも忘れ、ただただ呆然するのみだった。



### 三章【希望と絶望】

俺は訳も分からず、先頭に行く二人の男女のあとを歩いていた。

二人とも共通して、でかい。女は俺と同じくらい、男に至ってはスラムダングの赤木くらいある。だが顔つきは流川並みにいい。女の方もまるでモデルだ。

なんか一緒に歩きたくない。虚しいよ…。

「名は何という」

てか一体ここはどこなんだ。なんかいきなり殺されるとかいろんな事体験させられてマジ勘弁なんだよな。

「……聞こえないのか、お前」

「はい、なんでしょう？」

え、何キレてんのこの人。俺なんもやってないよ（・・・）

「名は？」

「あ、倉本弘樹っす」

「クラモト……？変な名前だな」

……いやいや。失礼ですよこの人。

「……クライドさん。失礼です。彼は突然こちらに来て混乱しているんですよ。まずはこちらから紹介するのが筋でしょう」

お、こちらの方はわかってらっしゃる様だ。やばいなあ惚れそうだよ。

「…歩きながらですまないが、俺はクライドという者だ。神明旅団の長を務めている」

「しんめいりよだん…？すか」

前を向いたままクライドという男は事務的に言葉を並べた。聞かない単語に俺は首を傾げる。

「私はレイです。弘樹さん。神明旅団とは私達が所属する団体の事です」

こちらは俺の横に来て一礼し、疑問にも答えてくれた。優しく微笑む姿に俺はめまいすら覚えた。

「色々と混乱している様だが、簡単に言うとお前は俺達の希望だ」

クライドが淡々と言う。俺も軽く相槌をうち、事務的に返す……。

って、んな訳あるか。

「…は？希望？」

「はい。唯一の光明です」

レイまでもが同じ事を言った。…この俺が希望…？学校の球技大会

で絶望を振り撒いた俺が、希望？

あの決死の状況の中、圧倒的な人数を相手に苦もなく俺を助けた強豪が、口を揃えて言った。…なんなんだ？一体。

「信じられないのも無理ないですが、真実なんですよ」

「……??」

ちよつと、頭がショートしそうになってきた。…ええっ？マジでタイム…。

「詳しい事はアジトについてからだ。落ち着いて話した方が、納得いくだろう」

「……えと、一つだけ聞いていいすか」

「なんですか？」

レイがあのだ殺スマイルで、俺を射ぬく。  
俺はしかし、動じず、決定的な問いを發した。

「…元の場所には、返してもらえるんすか？」

二人は暫く答えず、互いの顔を見合わせた。

そして、一言。

「それは、無理」

……絶望という一つの感情が、俺を支配した

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2741a/>

---

ストレンジャー

2010年10月21日01時53分発行